

戦争の定義と哲学

堤 未果

(国際ジャーナリスト)

徹底した現場取材と公文書分析を基軸に、その著書で
アメリカの真実を露わにしてきたジャーナリスト・堤未果は語る——
「かつて国家間の殺し合いであった戦争は、
別の姿をして現在も続けられている」
戦争の真実が見え辛い現代、衰退するジャーナリズムに警鐘を鳴らす。



「戦争」について考える際、まず「戦争の定義」そのものから整理していかなければなりません。それは様々なファクターによって変化し、私たちが混乱させるからです。

第二次世界大戦、ベトナム戦争、湾岸戦争、イラク戦争、かつて私たちが戦争という言葉で思い浮かべた国家間の殺し合いは、二〇〇一年九月一日の同時多発テロ事件を境に別のものに取り替わられました。「対テロ戦争」という新しい言葉が世界を駆け巡り、戦争から「国境」と「時間」の概念を消滅させました。今では政府がテロリストと認定した人物・集団に対する

問答無用の武力行使・殺戮が正当化されるようになってしまいました。また、IT革命が猛スピードで進化させた情報技術によって、単純化されたニュースが高速で手に入るようになった一方で戦争の真実がとて見えず辛くなりました。例えば読者からよく「オバマ前大統領はあれだけ平和的な大統領なのに、なぜ核をなくせなかったのか」「野蛮で好戦的なトランプ大統領は就任以来戦争をしていないが、何を企んでいるのか」などの問い合わせが来るのですが、マスコミが単純化して描く人物像だけ見ていると、「戦争」の実態は見えなくなってしまいます。

そもそも戦争とは何か

わかりやすい例として、「核なき世界」のスピーチでノーベル平和賞を受賞した、オバマ大統領のケースを見てみましょう。ノーベル平和賞の受賞スピーチでオバマ大統領は、直前に三倍に増やしたアフガニスタンへの派兵を擁護し、ミ

ランやジンバブエや北朝鮮などの国々へ将来米
国が介入する可能性に言及し、国家にとって武
力行使が「必要」であるだけでなく、道義的に
も「正当化」されると主張しました。

政治家の言葉の信憑性を裏づけるものは「予
算」です。「核なき世界」というキーワードがマ
スコミの見出しを飾る一方で、オバマ政権は
八〇〇億ドルの核兵器刷新予算を計上、うち
三〇〇万ドルが核弾頭搭載型の新型巡航ミサイ
ル開発に当てられていました。アメリカ政府の
考える「核廃絶の定義」は、核を載せる古いミ
サイルを新しい小型核にバージョンアップする
ことと同義だったのです。

「いや違う、オバマは戦争をしなかった」と支
持者は反論するのですが、本当にそうでしょう
か？ AIの進化は戦争を変えました。今は戦
地に行かなくても、米国内の基地のコックピッ
トで兵士が液晶画面を見ながらドローンを遠隔
操作し、海の向こうの人々を殺戮しています。
二〇一五年からの二年間で、オバマ政権が他国
に落とした爆弾は約五万発、無人機による攻撃
数はブッシュ政権の六倍以上でした。ビデオゲ
ームのような環境下で殺戮を行う兵士たちは、
四肢を失わずとも戦場と同じように精神が破壊

されPTSDを発症し、画面の向こうでは次々
に命が奪われていきます。これはれっきとした
「戦争」なのです。

一方、デイル(取引外交)が非常にうまい
トランプ大統領はどうか。「戦争はしない」とい
う公約を守ることで高い支持率を保ちながら、
防衛予算を増やしています。北朝鮮を挑発する
ことで日本や韓国に武器を買わせ、サウジアラ
ビアとアラブ首長国連邦を対象にした緊急武器
輸出法案のおかげで、ボーイングやロッキード、
レイセオンなどの軍需関連株は高騰、高水準を
維持して業界は大喜びです。ウインウィン戦略
を駆使する、武器商人にとっての有能営業マン
と言えるでしょう。つまり国家間の戦争をする・
しない、平和を主張する・しないにかかわらず、
アメリカ大統領の座についたら最後、五〇〇〇
億ドル規模の予算で権力を持つ軍需産業を潤わ
せることが重要任務になっている。これは構造
の問題なのです。メディアが描く戦争はいつも
人物が中心ですが、「オバマ前大統領だから」「ト
ランプ大統領だから」ということでは、全体像
は見えず、広告代理店や利権団体の差し出すス
トーリーに簡単に飲み込まれてしまいます。

私たちが戦争を考える時、何よりも「お金」
という出口、すなわち軍事関連予算や関連業界

の特需状況を、時間軸と空間軸で注意深く見て
いかなければなりません。

戦争の入口と出口から見えてくるもの

二〇一九年はコソボ紛争終結から二〇周年で
す。当時私はニューヨークに住んでいました。
紛争の原因になったボスニア内戦で、「民族浄
化」という初めて出てきた言葉の響きに恐怖を
感じたのを覚えています。日本では遠い国の出
来事としてあまり報道されていなかったように
ですが、国連や国際NGOの間では連日大きなニ
ュースになっていました。

多くの日本人の認識は、セルビアが加害者で
アルバニアが被害者という西側で描かれていた
構図でしょう。二〇年経った今も報道はあの頃
のまま、デイトン合意の立役者とされた当時欧
州・カナダ担当国務次官補だったホルブルック
外交官は、刑務所内で死亡したミロシェヴィツ
チを、バルカン半島を破壊した「戦争犯罪人」
として酷評していました。でも本当にそうでは
ようか？ ユーゴ爆撃は人道的な理由からだ
と強調する報道の陰で、ロンドン和平会議で
がミロシェヴィッチに突きつけた条件の内容と
経緯は検証されませんでした。利権の絡まない